



第 21 号
 月 1 回 発 行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所:愛媛県西条市
 上市甲 720-1

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

神道(五) (大和世界の建設)

古事記

北と一 (3)

— 八卦と洪範九疇 —

竹葉 秀雄

右ねじの法則

電流は磁界を作る。直線の導線に沿って流れる電流。即ち直線電流によって生ずる磁力線は、その電流に垂直な面内で電流を中心として同心円状になっている。そして、その向きは電流の流れている向きに右ねじを進めようと考えた時、ねじを回す向きと一致する。

これを右ねじの法則という。主体を中心に右旋の法則がここにも見られるのである。

卍(バンマン)まんじ

印度に於ける吉祥の様相で、まんじ、梵語で Svastika 室哩鞞蹉(シリバッサ) Svastika 塞縛悉底迦(スバシチカ)という。吉祥雲海・有樂・幸福の意で、仏の胸上に在る。吉祥の標識であるのを、吉祥万徳の集まる意から中国の訳経家が万の字に当てはめて用いた。

卍は康熙字典に従ったもので、高麗本の蔵経及び慧琳音義二十一の華嚴音義共に卍に作る。右旋の形で多くは卍に作る。右旋の卍は(みぎまんじ)と称し、仏を礼敬するに右旋三匝し、仏の眉間の白毫も 卍の相を示し右旋婉転している。故に卍に作り、古来

来卍(ひだりまんじ)は誤りなりとしている。

平凡社の百科事典によると、卍はとも書く。前者は中心から周囲に左旋したもの、後者は右旋したもの。これは太陽が光を放っている状態を象形化したものらしい。ヒンドウ教では太陽神ヴィシヌの胸部の旋毛を示すものとされ、仏教でも仏陀の胸や足うらに現われる瑞相とされジャイナ教でも使用される。ヒンドウ教チベット仏教では右旋と左旋とに意義の区別がなされているが、中国や日本では区別がなく、仏教の標識とされている。

卍と卐、いずれが右旋か。色々論議があるが卍は 卍の形ではあるまいか。そうだとすればは白毫の右旋だから卍が「みぎまんじ」とするがよいと思う。

瑞祥は右まんじでよいが、仏の世相、宇宙の作用には、前から述べてきたように陰陽奇遇右旋左旋もある。従って卍卐いずれもあつてよい。伊邪那岐神の神言は天地神仏の実相を明かに示し給うているのである。

北極上空における靈感から、地球の地軸磁場に及び、北極紫微宮から、天之御柱、陰陽奇遇右旋左旋に及び、河図洛書の「北を一」とする神理を窺ってきたのであったが、ここに至って私は、この神理は神理としながらも、更に根元初始のところを見極めねばならなくなった。「本来無東西、何処有南北、迷故三界城、悟故十方空」の空なる世界である。地上の限定された場所に於ては、北に一を見たてて東西南北を定めることは決して迷うが故ではない。陰陽二神の神言と行為は天之御柱を見立ててこれを教示し給い、日本はこの道によって国生み神生みをして神道による日本道を成しきつたて居り、中国に道を垂れて河図洛書八卦九疇洪範を生みなしてきているのである。北極に高天原を思い、そこに紫微宮あり、天之御中主神及び天津神々在ますと見るもよい。世界紅卍字会のように太乙北極真経を説くもよい。尊敬する先達の神仙達は、明

かにそれを観ていよう。が、私は更に究極を探ねたいのである。古事記の「あめつちのはじめのとき」の「はじめ」、「一」より以前の「はじめ」則ち「〇」零を「はじめ」とする「はじめ」である。初めなき初めとする初めである。「天地」は無限の広がり空間であり、無窮の流れの時間である。広がりなき広がり、流れなき流れ、その初めなき初め、名も無く業も無き唯一絶対の世界、その天地であり、その初めである。そこが高天原であり、天之御中主神はそこに「なりませる」のである。

第二章 農の史的考察

第二節 本邦史の変遷概観

菅原 兵治

戦国時代

而して八代將軍義政の頃に至れば、所謂東山時代として、京都は已に浮文浮華の状態に陥り、中央政府の実勢力は殆んど無力となり、之に乗じて山名、細川の両氏の下に群る野心家が京都に於てなしたる暴力革命的闘争が即ち応仁の乱である。彼等は何れも天下を取る者は我等だと考えて居たことであろう。然かも当時心ある豪傑の士は如何せしか。何れも地方地方に割拠して、史家の所謂「群雄の割拠」を見るに到つたのである。関東には北条がいる。甲斐には武田がいる。北越には上杉がいる。更に東北には伊達が居り、長州には毛利が居る。此等の群雄は殆んど小独立国家的経営をなしつつ互に民を養い武を練り常に中央を睥睨むしつつ攻略を是れ事となし、此処に弱肉強食の瀆武の世態、戦国時代を現出するに至つたのである。

而してこの戦国の乱世を統一平定したのは誰か。それは決して当時の文化人でも、知識階級でもなく、実に野人信長であり、野人秀吉ではないか。彼等の野樸にして剛健なる力を以て皇室を奉じて天下に号令するに至つて天下は始めて治に歸したのである。而してこの質に帰せる社会を承け、巧みに之を統治発展せしめたのが即ち徳川幕府である。一家家康が小田原征伐の戦功によつて秀吉より領地を増せられんとせし時、何故に京都に近くして東海道の中樞を扼せる三遠駿の三州を捨てて、敢えて函嶺を越えて「東夷」の国と呼ばれし荒漠たる関八州を自ら所望して此処に移りしか。世の多くの人々は恐らくは一步にても帝都に近き処の地を得んことを希うであろう。然かも家康は然らず、彼のこの深慮遠謀に就いては我等の大いに考えねばならぬものがあるではあるまいか。勿論、関東は八幡公以来源家の勢力扶植の地であるとはいへ、然かも家康が世々の興亡の跡に鑑み、新興勢力はどうしても「質」の地に崛起するものたることを知れる所以であると信ずる。

徳川時代

かくて江戸に創建せられし徳川幕府の初期は鬱然として国民——殊に武士階級の間に素樸にして澆刺たる活気が漲っていた。此等の事に関するいろいろな事例は史上に幾多私共の血の躍る様なものが存する。然るに元禄以後となつては、先ず幕府勢力の中堅たる旗本御家人から浮華淫蕩に陥り、世は又「浮文」の状態に流れてしまった。元禄時代といえ、已に浮文華奢な生活を連想せしむるに足るが、元禄以後に至りては此の趨勢は益々加わり来り、將軍吉宗を始め、水野、堀田等の閥老が心肝を碎いて時勢の救済に努むる処があつたが、大勢の趨く処如何とすべからず、世はひたすらに浮文への一路を辿るのみであつた。而してこの浮文的文相と相対立して起つた一方の勢力が、彼の新撰組等によつて代表せらるる「瀆武」とも称さるべき一派である。

明治維新

而してこの幕末の混乱せる世紀末的状态を、王政復古の名の下に建国の本質に帰せしめたものは、実に薩長土肥を始め諸藩の志士——当時の「田舎武士」ではないか。然り、かかるが故に維新当時の志士には確かに「質」の気魄と而して之に伴う「質」の生活とがあつた。然も其の「質」が、其の後西洋文化の速効肥料的刺戟の下に異状の速力で発達して、国民は今や又精神的に物質的に再び「質」を離れたる「浮文」の状態に乱舞し、陶醉して、只管に苟安享楽を事とする時、已に或は左傾といい、或は右傾といい、彼等の所謂暴力闘争の方途を進め、以て今日の世態を現出するに至つたのである。然し争乱の極は新生をもたらし、破壊の終は建設に至るものである。世は已に新生と建設とを誕生せしむべき陣痛期なるか。

已に「浮文」は時代の帳とばりに葬り去られつつある。然し「瀆武」も亦国民の信頼する処ではなくなつた。新しい「質」——將に生れ出でんとして未だ生れ出でざるもの。汝こそそれなのである。

月、西山に没して、日、未だ東天に昇らず。然かも、吾等は淪しずみ行く月を追わず、昇る東天の旭日を待たねばならぬ。

取材記 山崎闇齋先生生誕四百年祭に参列

三浦 夏南

十一月三十日、未明に西条市を出発した我々は山崎闇齋先生生誕四百年祭の執り行われる京都の下御霊神社しもごりやうへと車を進めた。今回の旅には二歳になつたばかりの長男と妻を連れて行くこととした。我々が皇国体に覚醒し、及ばずながらも自らの人生を維新奉公の道に捧げようと誓つた大きな転換点が闇齋先生の崎門学であつたので、長男を連れて闇齋先生の御霊前に参拜することが出来ることは有難いことであつた。我が一族を鍊成するにあつて、先生の崎門学は必修の科目としたいと考えている。闇齋先生の神道論は後の学者から批判されることもあるが、その根底にある求道の情熱と学究の精密さ、そして尊皇愛国、純忠至孝の心魂は我々後学の仰ぎ学ぶべき模範である。この根底なくしては学が如何に深くとも、如何に知略に優れようとも、道の本筋を誤つてしまふと思う。

陽もまだ出でぬ夜明け前の車中には懐かしさがある。まだ私が幼かつた頃、フリーライターをしていた父に連れられて出発した朝を思い出す。あの頃にはまだ旅の趣は理解できていなかったが、家族そろつて目的地へと向かう車中が楽しかつたことを記憶している。聞けば妻の家も家族で旅行に行くことが多かつたらしい。妻と互いの思い出を語りながら進む旅路はとても良い時間となつた。我々の一族勤皇はこの車中の如く親密なるものでありたいと思う。車内は狭く、息苦しく感ずることもあるかもしれないが、家族一体となつて、目的地へと向かうことは嬉しく、如何なる苦難でも乗り越えることが出来る。

京都へ到着し、昼食を済ませると時間に遅れないように下御霊神社へとすぐに向かった。平泉教授をはじめとする日本学協会の先生方、梅田雲浜先生の御子孫の梅田先生、その他闇齋先生門下の末裔の方々等大勢の参列者が来られていた。闇齋先生の厳肅なる祭祀に今もなおこれだけの人々が集まることに先生の偉大さを感じるとともに、先生の学問に連なることの厳しさを強く思った。祭祀に引き続き國學院と皇學館の先生方の講義があり、皇學館の先生の作成された闇齋門下系図には先生の影響が全国に及んでいたことを改めて実感させられた。國學院

の先生のお話になられた闇齋先生の神道説に関する講義には少し疑問点もあったが、此の点は詳しく考究しなければならぬ。詳細は紙面の都合上割愛する。講演終了後、闇齋先生ゆかりの品々を見学させていただけることとなった。先の会報にも記したように私は二度目の拝観となったが、妻と子には闇齋先生の御両親の絵を見せたかった。その絵と闇齋先生の添えられた文字からは先生の孝子としてのお人柄がたたかく伝わってくる。



親しみ深い孝行の御心がある。この心こそ先生の学問の原動力ではないかとさえ思う。崎門学の大家近藤啓吾先生はその著の中で母の懐に抱かれる子の母に対する絶対の信頼と安心は敬神尊皇の心情と一つのものであるという趣旨のことを書かれていたが、その通りであるように思う。妻子とともにこの美しい絵を通して先生の心魂に触れることが出来た。一族勤皇にあたり、親子の絆こそは一家の大支柱である。これが揺らげば家族は離散するより外ないのである。一族の団結なくして勤皇奉行の道は無力にして歩むことが出来ない。外に事業を拡大することも勿論大切であるが、内に心を洗い、母に抱かれる赤子の如き赤心を求め続けねばならない。

見学も終わり解散となると梅田雲浜先生のお誘いで折本代表達とともにカフェにてご馳走になった。梅田雲浜先生は歴史的に誤解も多く先生の真価が世に広く伝わっていない部分があるため、梅田先生が祖先顕彰の為に尽力されている。雲浜先生は道義学問に精通されていただけでなく、実際の経綸、戦略にも長けて居られたという。現代の保守派にもありがちなことだが、精神論ばかりで具体策がない。あつたとしても時代追従的なその場しのぎの戦術である。如何に理想、目標は尊くともそこに至る具体的な方法手順がなければそれは空論である。さらに言えばその方法手順が植民地的な借り物では如何ともし難い。闇齋先生をはじめ雲浜先生、崎門の人々はこの点に関して熾烈であった。闇齋先生の道学は倫理の尊さを説く学問ではなく、倫理に至るための学問だったのである。雲浜先生もその点

を深く継承されて、維新を具体的に顕現する道を模索し、提案し、実行されたのだと思う。我々も先生方に習い真の理想を明かにし、其処に至る道筋を詳らかにしたい。

梅田先生とお別れし、次はとある政治団体の方々と御一緒する機会を得た。詳細は割愛するが、戦後の真正保守運動の厳しさと難しさを先輩から丁寧に教えて頂いた。旧態依然たる保守運動は時間と共に益々資本と時勢に飲まれ、何が正義で、何が悪なのか分からなくなってしまふ。我々は令和の御代にふさわしい新しくも最も古い道を歩まねばならない。感慨深い一夜となった。

一夜明けて清水寺の美しい紅葉を妻子とともに楽しみ、御所の御苑を散策して帰途に就くこととした。京都での旅が楽しかったのか、旅が終わりに近づくとともに機嫌の悪くなる長男が印象的であった。フリーライターの父が私を日本中連れて回ってくれたように、今度は父となった私が子供たちを連れて求道の旅をするべき時がやって来たようだ。



とよくも農園だより

三浦美恵

暖冬という言葉がぴったりの今年の冬ですが、ふと手を止めると作業をしていた自分の息が白いのに気づき、冬の訪れを感じます。

今月は、アスパラガスの畝上げ・手入れ、里芋の収穫、秋野菜の収穫、各畑の片付けをしました。

まずアスパラガスの畝上げ・手入れについてです。定植したアスパラガスは、順調に育っているものもあれば、元気がなく枯れかかっているものも出てきました。水のやりすぎが原因ではないかと考え、水やりの回数を減らし、排水整備のために溝をきって畝を高くしました。これにより、水やりをしてもその水がずっと停滞して根が傷むのを防ぎます。無事育つことを願いながら毎朝晩ハウスの開け閉めに向かいます。

次に里芋の収穫です。鍬で一株一株掘りおこしていきます。鍬を当てる傷つけないよう慎重にする一方で、ちょうど両腕で円を作った時位の大きさの塊になっている里芋を根から掘り起こすのは力が必要です。掘り起こした後は塊になっている里芋を一つ一つ取り、根を切っていきます。力も、そして根気もいる非常に地道な作業ですが、お天道様のもとで皆が協力しながら出来る里芋の収穫は楽しく、家族で育てるのに適した野菜だと言えます。

続いて秋野菜の収穫です。白菜・キャベツ・大根・カブ、ブロッコリー・人参・ジャガイモが次々と育ち、畑はとても賑やかです。大量栽培は家計において今や欠かせない存在ですが、やはり芽が出て、その芽がみるみる生長し、やがて実をつけていく様子を見ていて一番嬉しいのは、少量多品種栽培です。立派に育った大根を持ち帰



り、その日の夜に早速食べた時のあの感動、瑞々しさ、嬉しさは農業を始めてから変わることがありません。畑の野菜を、ふんだんに使ったおいしい調理法を考えるのもまた楽しみの一つです。

最後に各畑の片付けについてです。定植・収穫した後放っておいた畑のマルチをはがしたり、里芋の親芋を回収していきます。本来ならば収穫後すぐに片づけるべきですが、バタバタと日々に追われ、出来ていませんでした。来年こそは終わったらすぐに片づけようと反省しながら、マルチを一枚一枚はいっていきます。

こうして一つ一つ片付けていくと、今年のとよくも農園での出来事が次々に浮かんできます。思えば今年も農法を変え、大きく変化した一年でした。一年前のこのページには、農具・肥料も最低限しか使わない自然農から、平成三十一年は肥料・堆肥を豊富に使い多収穫を狙う、有機栽培へと切り替えていく宣言をしていました。それがその後、有機栽培だけでは病虫害の被害が出た場合の対処が難しいことや、収量が安定しないため売り先が確保できないことから、再度方向性を転換しました。今やハウスを建設し、アスパラガスと里芋の大量栽培を主軸として、有機栽培を小規模に行う方向で進めています。農業を始めるまで気付かなかった現代農業の間。とよくも農園も御多分にもれず苦しみ、何度も家族会議をしました。主人も月報で度々書かせて頂いてきましたが、自給自足、勤皇村構想には莫大な資金が必要です。来年は、現実的な農業を進めながらも理想的な農業の研究に励み、何時の日かその理想を現実のものとして、家族が一つとなって勤皇村を営んでいけたらと思います。年の瀬が近づいてまいりましたが、健康には十分ご留意ください。そして来年も、ご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。



★活動報告

・十二月十一日(水)十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

・十二月十五日(日)十八時～二十一時 醒庵忌
ホテルマイステイズ松山(愛媛県松山市大手町一丁目十一-十)

・十二月十八日(水)十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★今後の予定

・一月八日(水)十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

・一月二十二日(水)十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

年会費

- ・ 一般会員 三千元
- ・ 賛助会員 一万円
- ・ 特別賛助会員 三万円
- ・ 支援会員 一万円

